歌に触れる

遊 縁 の 衆（人生を数倍楽しむ会）

例会作品帳

◎平成二十六年十一月十五日（第二十二回）

（佐藤　亮照）

本堂にご詠歌の声しんしんと講中のこころほとけに通ず

護摩堂に法嗣（ほっし）の修行見つめけり揺らぐ炎に光師を観（かん）ず

塔婆をたて和讃詠じて供養せり猫の旅立ち家族のひとり

（黒沼　貞志）

たまさかの出会いでいずる新しき人のつながり織色のごとし

ウェブサイトレシピの数が溢れおり貧しき時代遥かとなりて

雪冠る月山臨む跨線橋初夏に登りし汗を想えり

雪原を一輛列車が分け進む女子高生のにぎわい乗せて

雪いろの町を歩めば甦る遥か昔の通学の路

舞い降りて忽ち消ゆる淡雪を手で受け止める誕生日の朝

幾らでも口に入ると頬張りし義理チョコ甘く会話もはずむ

手を繋ぎ母子で歩む雪の路微かに聞こゆ春よ来いの唄

雪が消え花芽の顔出す庭の隅期待が膨らむ今年の彩り

瓦礫下にあると言われたフクシマの海は黙してメディアが語る

人により嘘も方便意味変わる子供も親も教師も窮す

記念日を二人で祝うレストラン話す相手はLINEの向こう

戦争を知らない世代が世の中を動かす社会もいつか来た道

自転車の朝刊配達様変わり気付いてみれば車となりぬ

蘖（ひこばえ）と共に苔むす杜の木よ初夏の陽を浴び芽吹きを迎えん（＊）

屋敷町茅葺の家陽に溢れ庭に華満ち客を迎えん（＊）

落葉と篠笛の音に人集い城址の中は秋歩みくる（＊）

寒戻り地蔵の肩に雪が積む被災の辛苦荷ふが如し（＊）

残雪がハートに残る初夏の山妻と語らいこころに刻む（＊）

歌に触れる

遊 縁 の 衆（人生を数倍楽しむ会）

クロスしたヒコーキ雲と日暈（にちうん）が重なる空にこころ湧きたつ（＊）

木道の片方は広き草紅葉夕暮れの中秋が老けゆく（＊）

千余段杖を伴い登り来る人を迎える山もみじあり（＊）

水鏡休み処の傍らにもみじ映して秋もう一つ（＊）

岩肌に無数の小銭喰い込みぬ注ぎし祈り木洩れ陽の中（＊）

秋の原木立に残るハンモック微睡（まどろ）む人のかほり残して（＊）

リフト乗り挨拶交わせば山の友向かう先には紅葉の世界（＊）

集う寺茶会の前の挨拶に訛り溢るる秋の陽の中（＊）

わが家にも遅き春あり水仙の初花ひと花黄に匂ふ庭（＊）

（＊）「Collabo. de 写歌」

（千葉　克明）

去年の夏刈り込みし梅の木（ぼく）今年満開花咲き乱れ

（寺崎　秀也）

時代（とき）を越え守り伝えし祈りあり法（のり）の灯火比叡の深山（みやま）

目隠しし心静かにみ仏とご縁を結ぶ灌頂（かんじょう）の堂

願い込め和讃検定福島へ記憶に残りし一泊二日

（長谷川美喜男）

紅花の郷にたなびく鯉のぼり桜の波にゆらゆらゆらと

成田より日本を飛び出す次男坊うれしくもありさびしくもあり

桜ちる河辺におよぐ鯉のぼりみじかい春を惜しむがごとく

腰おれし母の背中が物語る長きの不在後悔の念